
アイシテル

明日香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイシテル

【Nコード】
N1028M

【作者名】
明日香

【あらすじ】
百年先も愛を誓うよ。
お前は私の全てだ。

時を越えた太子と妹子の純愛物語。
君がいれば何もいらない。
君がいれば幸せだから。

貴方がいれば何もいら
ない。
貴方がいれば幸せだ
から。

プロローグ “今”と“昔” （前書き）

無限に広がる大宇宙

桜日和がネタ切れで困っているときに思いついたものです。

桜日和よりもこっちを優先して書くと思います（たぶん。）

太子と妹子の純愛物語にしたいです。

たぶん最後はハッピーエンド。

てゆうか基本甘かったり切なかったり。

どす恋な勇者サマはどうぞっ

プロローグ “今”と“昔”

（太子視点（今））

「なあ妹子。」

「なんですか？」

「私達さ、前世は恋人同士だったって言ったらお前は信じるか？」

「……………はあ？馬鹿なこといつてついに脳に蛆でも沸きましたか？」

「なっ……………ヒド男ッ！！！！」

「でも……………そうだったらいいですね。」

「へっ？」

「だって前世も、今も恋人同士だなんて『運命の糸で結ばれた二人』って感じしません？」

「そう……………だな。」

思い出す。

私の中にある、『前世の記憶』を。

“聖徳太子”だった私。

“小野妹子”だった君。

身分の差。

伝えてはならない言葉。

けして交わらない二人の運命。

．．．．．悲しい、別れ。

「太子？どうかしましたか？」

「あつ．．．いやなんでもない。妹子が珍しくロマンチックなこ
と言っからさあ可愛くって。」

顔を真っ赤にさせて怒る妹子。

「もううゝゝ！！恥ずかしいっ！！もう二度と言いません！！」

「あはは。ごめん。悪かったって。」

「ダメ！！許さない！！」

「どうしたら許してくれるの？」

「．．．．．キス．．．．．して。」

妹子がボソツと言う。

「りょゝかいっ」

妹子の唇に軽く自分の唇をあてる。

「機嫌直った？」

「~~~~っ!!!!!!」

再び赤くなる妹子。

昔は、こんなことすら許してはくれなかった。

私は“摂政、聖徳太子”で君は“官位五位、小野妹子”だったから。
ただ・・・、それだけで。

さあ、昔話を始めよう。

“摂政”と“臣下”の決して実らない『悲劇の恋物語』

第一章くすれ違う想いく（前書き）

想っていても届かない。

伝えたくても伝わらない。

素直になつては、いけない。

二人のすれ違う想い。

（多分）切ないです。

ok？

第一章くすれ違う想いく

く太子視点（昔）く

「妹子っ」

今日も妹子に会いに来た。
仕事なんてやってられない。

「嫌っ！！太子だ……。」

「お前今さりげなく嫌って言ったよなあ……。」

「気のせいじゃないですか？」

「そうか？まあそれより妹子！！遊「言っときますけど遊びませんよ。てか仕事しろ。」

「むうく……。妹子のケチっ！！」

「はいはい。」

全く相手にされない。
こんな時は……

「妹子、これは摂政命令だぞっ」

「……。はあ……。仕方ないですね……。」

妹子は渋々筆を置いた。

これがいつもの流れだ。

冷たくされても命令といえれば必ず妹子は聞いてくれた。

妹子は優しい。

本当は、私と遊ぶのは嫌かもしれない……。

命令だから仕方なくやっているのかもしれない。

それでも最後までつき合ってくれる妹子が好きなんだ。

「なあ妹子。」

「なんですか？」

「………なんでもない。」

言おうと思ってやめた。

飲み込んだ言葉。

それは………

「好きだぞ。」

たった一言。

伝えてはならない。

禁じられた想い——。

く 妹子視点（昔）く

「嫌つ太子だ……。」

遊びに来た太子に言った一言。
ホントは来てくれてうれしい。

「会いたかった。」

……なんて言えたらいいのに。
嗚呼、貴方が欲しい。
頭からつま先まで全部僕のものにしたい。
……こんなこと、望んではいけない。
わかってる。
でも……..
止まらないこの想い。
僕は貴方が——。

「命令だぞ」

命令……。

『命令』ならこんな僕でも貴方のそばにいれる。
貴方さえ、僕を求めてくれたら……..
叶わない願い。

「なあ妹子。」

「なんですか？」

太子は何かを言おうとした。

「……何でもない。」

嗚呼、その口で

「好きだ。」

って言つてほしかった。

その手で僕を抱きしめてほしかった。

一瞬期待した自分がいる。

自惚れかもしれない。

太子は僕が好きだなんて思うのは。

だって貴方にとって僕はただの『臣下』。

わかっていても傷つく僕の心。

こんなにも苦しいならいつそのことこの想いを伝えてしまいたい。

「好きです。」

たった一言。

伝えてはならない。

禁じられた想い——。

第一章くすれ違う想いく（後書き）

切ないのが好きだけど上手く書けない・・・。
てかほんとにすみませんっ！！
意味不小説まだまだ続きます。

境界線（前書き）

越えてはならない境界線

僕等はそれを越えてしまった

戻れなくてもいい

貴方がいれば

僕は貴方しかいない

貴方さえいれば

幸せだから――。

境界線

〽妹子視点（昔）〽

「妹子〽〽!!」

「なんですか？」

「妹子の大好きなツナおにぎりだぞ!! 食え!!」

「いりませんよ……。てか僕ツナ好きじゃないし。」

「いーから食えっ!!」

「これ以上仕事の邪魔すると土に埋めますよ。」

「生き埋め!？」

「ええ。」

普段の会話。

こんなやりとりがたまらなく楽しい。

貴方といられる時間が好き。

貴方のすべてが愛しい。

「妹子〽〽」

なんで……。そんな優しい声で僕を呼ぶの？
僕はただの『部下』。

なのに・・・貴方はなんで僕なんかに構うの？
貴方は僕をどう想っているの？

「太子・・・・・・・・。」

「ん？」

「なんで僕に構うの？」

声が震える。

太子がしばらく黙り込む。

「・・・そりやお前・・・・・・・・。」

「面白いからに決まってるだろうっ！！」

面白い・・・・・・・・か。

僕を気に入ってくれているだけで喜ばなければいけないのに・・・・・・・・。

なぜか悲しい・・・・・・・・。

僕を恋愛対象としてみてほしかった。

涙がこぼれた。

「い、妹子！？？」

「あ………ごめんなさいっ……！僕、用事思い出し
たんで帰りますっ……！」

なにやってんだ僕……。
でも……涙が止まらない。

走って帰ろうとしたその時。

「妹子。」

太子に後ろから、抱き締められた。
太子の匂いが僕を包む。

「たい……し？」

「愛してる。」

「……え？」

「さっきのは嘘。私はお前を愛してるからそばにいたいんだ。」

太子からの告白。
死ぬほど嬉しかった。

「僕も・・・愛してます!」

信じられないほど幸せ。

けど

この幸せは

長くは続かない

だから・・・今だけ、今だけは夢をみさせて。

いつかは覚める

儚い夢を――。

踏み入れてはならない境界線。

僕らはそれを越えてしまった。

戻れなくてもいい。

貴方と一緒になら――。

く太子視点（昔）く

「妹子くく！！」

私の大切な……信頼できる部下。

……のはずだった。

なのに……今は君のことを誰よりも愛してる。

わかっている。

この想いは伝えてはいけない。

きっとこの想いを伝えたら君は悲しむだろう。

今の関係も……崩れてしまう。

なら……それ以上のことは望まない。

君のそばで笑えるなら。

だけど……

どうして

そんなこと、聞くの？

本当のことを言えば、君の全てが欲しい。

だけど・・・今以上の関係を望めば全てが終わってしまう。
だから私は

嘘をつく。

なのに君は泣き出した。

思わず抱きしめてしまった。

とまらないよ。

あふれる思い。

もう・・・嘘はつけない。

「愛してる。」

そしたら君は笑ってくれた。

「僕も・・・愛してます!」

そういつてくれた。

嗚呼、幸せだ。

だから

この幸せを

永遠に――。

初めて心から愛した気持ち。

これを夢なんかにはしたくない――。

踏み入れてはならない境界線。

私たちはそれを越えてしまった。

戻れなくてもいい。

君と一緒になら――。

僕は貴方しかいない。

私は君しかいない。

貴方がいれば・・・

君がいれば・・・

幸せだから――。

僕らは静かに口づけを交わした。

境界線（後書き）

すみません・・・。

まさかの腐ww

私の脳内はどうなってるんだよ・・・（*|*；

しかも『one love』のイメージがなんか『magnet』っぽくなっちゃった。

まあドンマイですよ。

ではここまで読んでくださった方々

ありがとうございました！！

シアワセ（前書き）

知ってましたか？

貴方がいれば

僕は幸せなんです。

シアワセ

（妹子視点（昔））

「妹子、愛してる。」

太子からの告白。

「僕も・・・愛してます！」

そして僕と太子は静かに口づけを交わした。
その日から僕は幸せだった。

いつでも愛しい貴方が隣にいる。
それだけで幸せなんだ。

「・・・・・・・・ちゃん！！妹ちゃん！！」

「・・・・・・・・あつ、えつ、なつ、なに！？」

「妹子さん、ぼーっとしてどうしたんですか？」

「妹子、顔赤いぞ。熱でもあるのか？」

「大丈夫？」

同僚の閻魔さん、鬼男君、曾良君、芭蕉さんが遊びに来たらしい。
みんなが心配そうな顔をしているなか閻魔さんだけが黒い笑みを浮かべていた。

「なっ、なにニヤニヤしてるんですか閻魔さん！！」

「えっ？そんな顔してないよぉ」

嘘だ。

この顔は何かをよからぬことを考えている顔だ。

僕がそんなことを考えていると窓から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「いゝも〜こ〜〜！」

このアホ声は

「太子！」

何故だろう。

太子がいるだけで顔がほころぶ。

ああ、僕は重病だ。

太子のことが好きすぎて胸が苦しい。

人を愛するという初めてのこと。

戸惑いもあるが、太子を愛している自分が嫌いじゃない。

貴方がいれば

何もいらない。

ただ貴方といられるだけで

僕は幸せなんだ。

意地っ張りな僕には伝えられけど

貴方のこと、世界で一番

愛しています——。

シアワセ（後書き）

・・・短かつ!!

ちなみに今、軽いスランプです（<―>）

ああ、ネタの神よ

我に力を~~~~!!!!!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028m/>

アイシテル

2010年10月16日08時11分発行